

## 臨床検査技師養成校の学生における自尊感情と 関連する諸要因

近 末 久美子\*

【要 旨】 本研究は、臨床検査技師養成校の学生に着目し、自尊感情の経年変化や学年による変動の一端を明らかにすることおよび自尊感情と「ストレス反応」「大学生生活」「生活習慣」など、関連する諸要因を検証することを目的とする。

調査は、自記式質問法によるアンケートを実施し、2年間(2016年53名、2017年62名)のデータをまとめた。

今回の調査結果では、臨床検査技師養成校の学生における自尊感情は、年度および学年によって、ほとんど有意差はみられなかった。また、自尊感情は「ストレス反応」と負の相関がみられ、「大学生生活」と高い相関があり、特に大学生生活の充実感や勉強への意欲、友人関係および生活習慣と関連することがわかった。友人関係や生活習慣を整えることで、大学生生活がより充実し、ストレス反応の軽減や自尊感情の上昇をもたらすことが示唆された。今後、医療従事者養成校においても自尊感情を高める授業の工夫、大学生生活の支援が必要であると考えられる。

【キーワード】 自尊感情、ストレス反応、大学生生活の充実度、友人関係、生活習慣

### はじめに

「自尊感情」は、心理学用語の Self-Esteem を訳した言葉で、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態を示し、欧米と同様、日本でも多くの研究が行われている。中でも Rosenberg<sup>1)</sup>は、自尊感情を「自己に対する肯定的または否定的態度」と捉え、自尊感情の高さは自己を尊重し、自己の価値を認めることを意味しているとした。そこで、本研究においても、自尊感情を他者との比較で自分を肯定的にとらえようとする単なる優越性の感情ではなく、自他に対する理解ができ、自分の否定的な面をも受け入れ、自分をかけがえのない存在であるとする感情と位置付けた。

一方、日本では、特に児童期や青年期の自尊感情が諸外国に比べて低いことが指摘され、自尊感情を高めるための教育実践や教育施策も行われている。「高校生の未来意識に関する調査」(日本青少年研究所 2002<sup>2)</sup>)の調査結果では、「自分は他の人々に劣らず価値のある人間である」という設問に対して、該当すると回答した割合が欧米や中国に比べ、低いという結果がみられた。また、「第7回世界青年意識調査報告書」(内閣府 2004<sup>3)</sup>)では、明るさややさしさ、忍耐力・努力家など10項目で欧米等の諸外国に比べ、低い割合であった。そして、小塩ら<sup>4)</sup>は、文献調査から、中高生は自尊感情が低い傾向にあること、大学生、成人と年代が上がるにつれ、上昇がみられること、中高生

\*川崎医療短期大学 臨床検査科、川崎医療福祉大学 臨床検査学科 taki@jc.kawasaki-m.ac.jp

では直線的に、大学生では曲線的に近年下降していることを報告している。日本人の自尊感情の低さは、日本が謙虚さを大切にする文化であることにも起因することが考えられるが、近年、生徒や学生が自分に自信を無くし、自分に対して肯定的な気持ちが低下しつつあることも一因しているのではないだろうか。学校現場では、いじめや不登校、休学・退学、学ぶ意欲の低下などの問題が年々増加しているが、このようなことも自尊感情の低さに影響しているのではないかという指摘も多い。

自尊感情についての研究は多く、桜井ら<sup>5)</sup>は自尊感情と抑うつおよび絶望感が負の相関にあることを示し、精神的に不健康な者は自尊感情が低いことやストレス反応と負の相関があることを示した。また、佐藤<sup>6)</sup>は抑うつ傾向が強い学生の特徴として、自尊感情の低下がみられること、家族関係の希薄さがみられることを示している。さらに、合田ら<sup>7)</sup>は看護学生を対象に、自尊感情と職業アイデンティティの間に若干の関係性があるとし、入学時に自尊感情が低い学生への教育支援が職業アイデンティティの形成に役立つと示唆している。

そこで本研究では、大学生、特に医療系である臨床検査技師養成校での自尊感情の現状を明らかにし、その自尊感情と関連する諸要因を明確にすることを目的とする。そして、自尊感情を高める教育支援を行う必要性について示唆を得たので報告する。

## I. 対象と方法

対象は、岡山県内の臨床検査技師養成校に在籍

する学生 116 名(男子 16 名、女子 100 名、無回答 1 名)である。その内訳は、2016 年度 2 年生(53 名、うち男子 6 名)と 2017 年度の 2 年生(63 名、うち男子 10 名、無回答 1 名)である。

調査は、2016 年度と 2017 年に、いずれの年度も前期終了時(7 月)に実施した。すべて自記式質問法によるアンケートを行い、授業とは別の日に教室内で配布、記入後回収した。質問紙は、尺度間の整合性をとるために記名式としたが、データの整理については、乱数番号処理を行い実施した。集計・解析には StatFlexVer.6.0 解析ソフトを使用した。

自尊感情尺度：Rosenberg<sup>1)</sup>が作成した自尊感情尺度を星野<sup>8)</sup>が日本語訳したものを使用した。10 項目で、そのうち 5 項目は逆転項目とした(表 1)。「いいえ」1 点～「はい」4 点の 4 段階評価で、逆転項目(R)は逆に得点化した。逆転項目から導かれる気持ちは、表中の( )内に示した(本著者解釈)。40 点満点の尺度であり、合計得点が高いほど自尊感情が高いことを示している。

ストレス反応尺度：外山<sup>9)</sup>が作成したストレス反応尺度を用いた。これは「不機嫌・怒り感情」(例えばいらいらするなど)、「身体的反応」(例えばつかれやすいなど)、「不安・抑うつ感情」(例えば不安を感じるなど)、「無力的認知・思考」(例えば何もやる気がしないなど)の 4 つの下位尺度(各 5 項目、合計 20 項目)からなる。「全くあてはまらない」1 点～「非常にあてはまる」4 点の 4 段階評定であり、80 点満点である。得点が高いほどストレス反応が多いことを示す。

生活に関する質問：大学生生活、友人関係、保護

表 1 自尊感情尺度の各項目得点の比較

	2016年度2年生		2017年度2年生		2016年度1年生	
	平均値	標準偏差	平均	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 私は自分に満足している。	2.11	0.87	2.34	0.77	2.27	0.73
2. 私は自分がだめな人間だと思う。(R)(私は自分がだめな人間だと思わない)	2.04	0.81	2.31	0.80	2.30	0.70
3. 私は自分には見どころがあると思う。	2.00	0.55	2.24	0.69	2.30	0.72
4. 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。	2.58	0.75	2.76	0.74	2.77	0.70
5. 私には得意に思うことがない。(R)(私には得意に思うことがある)	2.47	0.85	2.50	0.80	2.67	0.91
6. 私は自分が役立たずだと感じる。(R)(私は自分が役に立つ人間だと思う)	2.38	0.79	2.56	0.78	2.58	0.83
7. 私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う	2.60	0.72	2.85	0.70	2.87	0.77
8. もう少し自分を尊敬できたらと思う。(R)(十分自分を尊敬できていると思う)	2.19	0.88	1.90	0.59	1.93	0.71
9. 自分を失敗者だと思いがちである。(R)(自分を失敗者だとは思わない)	2.00	0.76	2.24	0.74	2.37	0.82
10. 私は自分に対して、前向きな態度をとっている。	2.45	0.95	2.65	0.75	2.75	0.73
合計	22.82		24.35		24.81	

注) (R)は逆転項目であることを示す。( )内は逆転項目から導かれる自尊感情項目(本著者解釈)を示している。

者との関係、生活習慣等についての項目を本養成校の状況に合わせて著者が作成した。全部で20項目からなり、4段階評定である。

その他、生活関連事項として、平日1日あたりの平均勉強時間と平均睡眠時間、および1週間の平均運動時間を数値で記入してもらった。

なお、2017年度2年生については、2016年度1年次に自尊感情尺度とストレス反応尺度のみの実施を行った。

調査にあたっては、研究の趣旨等を口頭および書面で説明した。研究への参加が成績とは関係がないことや参加の有無が任意であることを説明し、同意書の提出で同意を得た。また、同時に同意撤回書も配布し、撤回はいつでも自由に行えることを伝えた。

## II. 結 果

### 1. 各尺度得点および勉強時間等の年度比較

自尊感情得点の各年度による平均および標準偏差(SD)は表1に示した。2017年度2年生の合計得点は、2016年度1年生と比較して有意な差がみられず、大学生活を1年経過してもほぼ同一の値を示した。また、2017年度2年生は、2016年度2年生の合計得点に比べ、有意差はみられないものの、若干増加傾向がみられた( $p=0.07$ )。自尊感情尺度10項目の詳細をみると、「8.もう少し自分を尊敬できたらと思う(R)(十分自分を尊敬

できていると思う)」についてのみ、2017年度2年生が2016年度2年生と比較して有意に低かった( $p<0.05$ )。

次に、各尺度得点および勉強時間、睡眠時間、運動時間等を年度比較(表2)すると、ストレス反応得点および生活に関する質問については、年度によって有意差がみられなかった。しかし、平日の平均勉強時間においては、2017年度2年生が2016年度2年生と比較して有意に低かった( $p<0.01$ )。睡眠時間、運動時間において有意差はみられなかった。

### 2. 自尊感情得点と各尺度得点および勉強時間等との関連性

各尺度間の相関係数を表3に示す。2016年度、2017年度とも、自尊感情得点はストレス反応尺度と有意な高い負の相関がみられた( $-0.56$ 、 $-0.57$ 、 $p<0.01$ )。各下位尺度も2017年度の身体的反応をのぞいて、すべて有意な負の相関がみられた( $-0.28$ ~ $-0.61$ 、 $p<0.01$ )。また、自尊感情得点は2016年度、2017年度とも、生活に関する項目において、保護者との関係以外、大学生活(0.47、0.56)、友人関係(0.48、0.38)、生活習慣(0.33、0.46)で有意に相関がみられた( $p<0.01$ )。また、自尊感情得点は、勉強時間および睡眠時間とは相関はみられなかった。さらに、2016年度のみ運動時間と有意に相関がみられた(0.28、 $p<0.05$ )。

表2 各尺度の得点平均と標準偏差の年度比較および検定結果

	2016年度2年生(n=53)		2017年度2年生(n=62)		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自尊感情尺度	22.82	5.17	24.35	4.80	NS
ストレス反応尺度					
不機嫌・怒り感情	7.02	2.55	7.45	2.93	NS
身体的反応	9.98	3.66	9.47	3.34	NS
不安・抑うつ感情	8.81	3.80	8.26	3.59	NS
無力的認知・思考	10.21	3.95	9.60	3.46	NS
ストレス反応(全体)	36.02	10.79	34.77	10.96	NS
生活に関する質問					
大学生活	12.96	2.64	12.73	2.78	NS
友人関係	10.55	2.59	11.08	1.97	NS
保護者との関係	16.27	2.64	16.26	2.57	NS
生活習慣	11.66	2.62	11.90	2.43	NS
生活全体	55.85	7.82	56.48	8.25	NS
平日の勉強時間/日	2.37	0.98	1.72	0.87	**
平日の睡眠時間/日	5.62	1.12	5.78	1.11	NS
1週間の運動時間/週	2.50	3.78	1.96	3.48	NS

Mann-WhitneyのU検定 \*\* $p<0.01$

表3 各尺度および勉強時間、睡眠時間、運動時間の相関係数

	相関係数													
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
(2016年度2年生)														
自尊感情尺度(1)	-	-0.28*	-0.43**	-0.61**	-0.38**	-0.56**	0.47**	0.48**	0.02	0.33*	0.54**	-0.06	0.13	0.28*
ストレス反応尺度														
不機嫌・怒り感情(2)			0.33*	0.45**	0.38**	0.64**	-0.19	-0.19	-0.07	-0.13	-0.21	0.06	-0.14	0.05
身体的反応(3)				0.45**	0.48**	0.75**	-0.05	-0.05	0.21	-0.37**	-0.30*	0.00	-0.28*	-0.33*
不安・抑うつ感情(4)					0.60**	0.83**	-0.22	-0.17	0.07	-0.28*	-0.27	0.17	-0.08	-0.16
無力的認知・思考(5)						0.83**	-0.46**	-0.20	-0.06	-0.43**	-0.43**	-0.21	-0.15	-0.31*
ストレス反応(全体)(6)							-0.47**	-0.20	0.06	-0.41**	-0.41**	0.00	-0.21	-0.27
生活に関する質問														
大学生生活(7)								0.38**	0.25	0.40**	0.73**	0.40**	0.09	0.27*
友人関係(8)									0.54**	0.18	0.76**	0.21	-0.02	0.38**
保護者との関係(9)										0.16	0.66**	0.42**	-0.09	0.18
生活習慣(10)											0.61**	0.16	0.27*	0.21
生活全体(11)												0.40**	0.07	0.41**
平日の勉強時間/日(12)													-0.22	0.07
平日の睡眠時間/日(13)														0.05
1週間の運動時間/週(14)														
(2017年度2年生)														
自尊感情尺度(1)	-	-0.60**	-0.21	-0.56**	-0.51**	-0.57**	0.56**	0.38**	0.22	0.46**	0.60**	0.03	0.21	0.13
ストレス反応尺度														
不機嫌・怒り感情(2)			0.34**	0.72**	0.66**	0.82**	-0.44**	-0.12	-0.18	-0.46**	-0.44**	0.05	-0.28*	-0.12
身体的反応(3)				0.53**	0.51**	0.73**	-0.30*	-0.24	-0.07	-0.20	-0.29*	0.01	-0.11	-0.27*
不安・抑うつ感情(4)					0.63**	0.88**	-0.43	-0.25	-0.02	-0.40**	-0.46**	0.13	-0.15	-0.22
無力的認知・思考(5)						0.86**	-0.53**	-0.29*	-0.20	-0.40**	-0.48**	-0.25*	-0.14	-0.14
ストレス反応(全体)(6)							-0.52**	-0.28*	-0.20	-0.44**	-0.51**	-0.02	-0.20	-0.23
生活に関する質問														
大学生生活(7)								0.44**	0.45**	0.57**	0.84**	0.19	0.22	0.17
友人関係(8)									0.33**	0.33**	0.63**	0.22	0.25	0.13
保護者との関係(9)										0.61**	0.76**	0.32*	0.09	-0.02
生活習慣(10)											0.81**	0.18	0.40**	-0.09
生活全体(11)												0.27*	0.32*	0.09
平日の勉強時間/日(12)													-0.15	-0.15
平日の睡眠時間/日(13)														0.10
1週間の運動時間/週(14)														

\*p<0.05 \*\*p<0.01

\*p<0.05 \*\*p<0.01

表 4 大学生生活や生活習慣に関する項目の平均、標準偏差および自尊感情得点との相関の検定

	2017年2年生		2016年2年生		自尊感情得点との相関の検定		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	2017年2年生	2016年2年生	
大学生生活	1. 私は、大学の勉強が得意だ	2.06	0.62	1.94	0.63	**	**
	3. 私は、大学生活に充実感を覚える	2.66	0.75	2.75	0.78	**	**
	13. 私は、大学の先生を信頼している	2.82*	0.76	3.15	0.64		*
	18. 私は、大学の授業に意欲的に取り組んでいる	2.74	0.70	2.81	0.74	**	**
	19. 私は、家庭学習に意欲的に取り組んでいる	2.48	0.76	2.32	0.80		**
友人関係	4. 私は、友達の数が多いほうだ	2.52	0.70	2.49	0.82	**	
	5. 私は、友達から信頼されているほうだと思う	2.66	0.63	2.43	0.69	**	**
	6. 私は、友達とよく話をする	3.23	0.66	2.98	0.75	*	
	7. 私は、友達とよく遊ぶ	2.68	0.74	2.64	0.88		**
親との関係	8. 私は、保護者の意見を受け入れるほうだ	3.13	0.59	3.28	0.63		*
	9. 私は、保護者を信頼している	3.44	0.64	3.51	0.61		
	10. 私は、保護者と料理やスポーツなどを一緒にすることが多い	3.02	0.90	2.94	0.96		
	11. 保護者は、私のことをよく理解してくれている	3.37	0.68	3.28	0.74		
	12. 保護者は、私のすることによく賛成してくれる	3.31	0.64	3.28	0.72		
生活習慣	14. 私は、普段よく眠れる	3.06	0.83	3.21	1.01		
	15. 私は、規則正しい生活が送れているほうだ	2.55	0.88	2.47	0.97		**
	16. 私は、食事を三食規則的にとっている	3.34	0.85	3.08	0.98		
	17. 私は、精神的に落ち着いている	3.00	0.66	2.91	0.74	**	**
その他	2. 私は、運動能力あるいは芸術的な才能(音楽や芸術など)がある	2.10	0.78	2.23	0.82	**	**
	20. 私は、今の自分が好きだ	2.42	0.74	2.25	0.81	**	**
合計	56.48	8.25	55.85	7.82	**	**	

\*p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01

### 3. その他の尺度間の関連性

ストレス反応尺度は、各年度とも大学生生活および生活習慣と有意に負の相関がみられた(-0.41~-0.52,  $p<0.01$ )。また、各年度とも大学生生活は友人関係および生活習慣と、有意な相関がみられた(いずれも  $p<0.01$ )。保護者との関係は、友人関係、生活に関する質問合計、勉強時間と有意に相関がみられた(勉強時間 2016 年度 0.42,  $p<0.01$ ; 2017 年度 0.32,  $p<0.05$ )。一方、睡眠時間では、各年度とも有意な相関がみられたのは生活習慣であった(2016 年度 0.27,  $p<0.05$ ; 2017 年度 0.40,  $p<0.01$ )。さらに 1 週間の運動時間とストレス反応の下位尺度である身体的反応においては、各年度とも有意にやや負の相関がみられた(2016 年度 -0.33,  $p<0.05$ ; 2017 年度 -0.27,  $p<0.05$ )。

### 4. 自尊感情得点と生活に関する項目との関連性

各年度における生活に関する項目の平均と標準偏差を表 4 に示す。「13. 私は、大学の先生を信頼している」という項目のみ、2017 年度 2 年生が 2016 年度に比較して有意に低く ( $p<0.05$ )、その他の項目および合計に有意差はみられなかった。各年度とも自尊感情得点と有意に相関がみられるのは、大学生生活に関する項目が最も多く、「1. 私は大学の勉強が得意だ」「3. 私は、大学生活に充実感を覚える」「18. 私は、大学の勉強に意欲的に取り組んでいる」である。その他、「5. 私は、

友人から信頼されているほうだと思う」「17. 私は精神的に落ち着いている」などが各年度とも自尊感情得点と有意に相関があった項目である。

## III. 考 察

今回の調査では、臨床検査技師養成校の自尊感情得点は、2016 年度 2 年生が  $22.82 \pm 5.17$  点、2017 年度 2 年生が  $24.35 \pm 4.80$  点であった。外山・桜井ら<sup>10)</sup>による研究で報告された国立大学生(406 名)の自尊感情得点は平均  $27.65 \pm 6.71$  点、豊田ら<sup>11)</sup>による大学生 150 名の自尊感情得点は  $25.44 \pm 4.61$  点であり、それらに比較するとやや低い結果であった(いずれも 10 項目、4 件法)。また、西田ら<sup>12)</sup>のリハビリテーション医療系学生を対象とした研究においては、自尊感情得点の平均は  $24.0 \pm 5.6$  点(10 項目、4 件法)であり、同じ医療従事者職養成校の大学生では、一般の大学生に比較して、自尊感情が低いことが伺われる。合田ら<sup>7)</sup>は、研究対象の看護学生における入学時の自尊感情得点は、一般大学の女子学生の得点に比較して低いと報告しており、職業的な意識が影響していることも推測できる。が、合田ら<sup>7)</sup>の調査は短期大学生(3 年制)が対象であり、学力面や劣等感等も考える必要があろう。医療従事者養成校の学生において自尊感情がやや低いことは職業意識や仕事に対する自信、仕事に自分の能力を生かせるという意識の低さにつながる可能性もあり、

職業をある程度明確な目標とした大学にとっては大きな課題となり、今後さらに検討を要する。

次に、今回の調査結果による自尊感情得点は、年度、学年による比較では、いずれも有意差がみられなかった。合田ら<sup>7)</sup>の研究によると、看護学生では入学時に比べて卒業時に有意に上昇がみられたと報告されており、臨床実習の経験等で上昇することも推測できるため、今後さらに検討していく必要がある。臨床・臨床実習は、患者さんや先輩技師の方々、医師や看護師といった医療人の方々、およびグループ内の同級生など人間関係を築かなければならない場面が多い。また、応用力や問題解決力を問われ、自分自身が能動的に動かなければならない状況が多くあり、自尊感情が高められる要因となるのではないかと伺われる。

一方、今回の調査では、自尊感情得点は2016年度、2017年度ともストレス反応と有意に負の相関がみられた。これは外山・桜井ら<sup>10)</sup>による報告と同様の結果であり、自尊感情とストレス反応は大きく影響していると考えられる。臨床実習や国家試験受験などストレスが多いと考えられる医療系の大学にとって、少しでもストレスの軽減を支援していくことは、自尊感情を高めることにつながるのではないかと考えられる。また、自尊感情得点は、大学生活、友人関係、生活習慣などと関連があることもわかった。自尊感情は、単なる他者との比較や優越性ではなく、自他に対する理解や自分の否定的な面も受け入れることであり、社会人の準備段階としての大学生活を有意義に過ごすためには、重要な要素である。逆に言えば、大学生活における友人や教員との人間関係を通して、他者と自己とを受容していく過程は、医療人としての仕事を遂行していくための人間性を養うことにほかならないと言えよう。さらに、大学生活の充実感や意欲は、友人関係や生活習慣と相関があり、ストレス反応とは負の相関があるという結果であった。これらのことから、友人関係や生活リズムを整えることにより、勉強や生活に意欲的になり、大学生活が充実する。さらに、その充実感が高まることによってストレスが軽減し、自尊感情が高まり、大学生活がより意欲的になると

いう正の循環が起こることが推測できる。西田ら<sup>12)</sup>は、リハビリテーション医療系学生は、抑うつ傾向、ストレス反応が高く、自尊感情は低いと報告している。また、家族内で相談できる人物が多いことや生活リズムが確立していることが抑うつ傾向を抑えるということを示している。1日の大半を学校で過ごす大学生にとって、人間関係や生活習慣は、精神面や心理面に大きな影響を及ぼす。現在の大学では、友人関係が上手くいかない学生や生活が不規則で勉強に身が入らない学生も多く存在している。そのような状況を少しでも改善できるよう支援することで、学生の自尊感情が高まり、大学生活を充実させることができるのではないだろうか。自尊感情を高める教育に力を入れることは、幼児・児童・生徒の発達段階における教育の問題だけではなく、高等教育特に職業を意識した大学や専門学校でも重要な課題であると言えよう。いや、むしろ、自己を見つめ、社会生活や職業における適性を確認する過程は、高等教育でこそ行わなければならない。そして、特に医療従事者をめざす学生にとって、患者さんや同じ医療従事者の方々とのように向き合い、自分ができることとできないことを把握し、感情のコントロールをどのように行っていかなど他者を受け入れ、自己を理解していく力を身に付けていくことは仕事力につながる過程ではないだろうか。

今回の研究の目的は、自尊感情と関連する要因を探ることであり、ストレス反応とは負の相関があり、大学生活の充実度や友人関係、生活習慣などが関連することがわかった。一方、目的とはやや外れるが、今回の調査で、保護者との関係は、友人関係、大学生活に関する質問の合計、勉強時間と有意に相関がみられた。実際、学校現場では、成績が不振な学生や友人関係が上手くいかない学生は、保護者との関係に何らかの問題を抱えているケースもあり、このことの裏付けとなるような結果であった。今後は、保護者との関係と成績など、別な視点での検討も必要であろう。

今回の調査では、友人関係を良くしたり、生活リズムを整えたりすることが、大学生活の充実感を増し、ストレス反応を軽減すると同時に自尊感

情を高めることが示唆された。今後は、高等教育、特に医療従事者養成校においても自尊感情を高めるような授業の工夫、大学生活の支援について検討したいと考えている。

#### 文 献

- 1) Rosenberg M. Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Prinston University Press.
- 2) 日本青少年研究所. 高校生の未来意識に関する調査, 2002年5月. [www1.odn.ne.jp/~aaa25710/research/](http://www1.odn.ne.jp/~aaa25710/research/)
- 3) 内閣府. 第7回世界青年意識調査報告書. 2004. [www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/html/hyoushi.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/html/hyoushi.html)
- 4) 小塩真司, その他. 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響. 教育心理学研究 2014; 62: 273-82.
- 5) 桜井茂男. ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology 2000; 12: 65-70.
- 6) 佐藤 武. 大学生にみられるうつ状態における対人関係及び両親による影響. 心身医学 2009; 49: 1131-2.
- 7) 合田友美, その他. 看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関連から考える教育的支援. 川崎医療短期大学紀要 2011; 31: 75-81.
- 8) 星野 命. 感情の心理と教育(2). 児童心理 1970; 24: 1445-77.
- 9) 外山美樹. ストレス反応に及ぼす生活ストレスと自尊感情の影響—ネガティブ, ポジティブの生活ストレス尺度を作成して—. 筑波大学人間学類平成8年度卒業論文
- 10) 外山美樹, 桜井茂男. 大学生における自尊感情, 日常的出来事, およびストレス反応の関係. Tsukuba Psychological Research 1998; 20: 125-33.
- 11) 豊田加奈子, 松本恒之. 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究. 東洋大学人間科学総合研究所紀要 2004; 創刊号: 38-54.
- 12) 西田齊二, その他. リハビリテーション医療系学生の抑うつ状況について—学習性無気力の観点から—. 四條畷学園大学 リハビリテーション学部紀要 2013; 9: 27-34.
- 13) 仁科祐子, 乗越千枝. 看護学生のコミュニケーションスキルと自尊感情および大学生生活満足度との関連. 日本看護研究学会雑誌 2010; 33(3): 213.